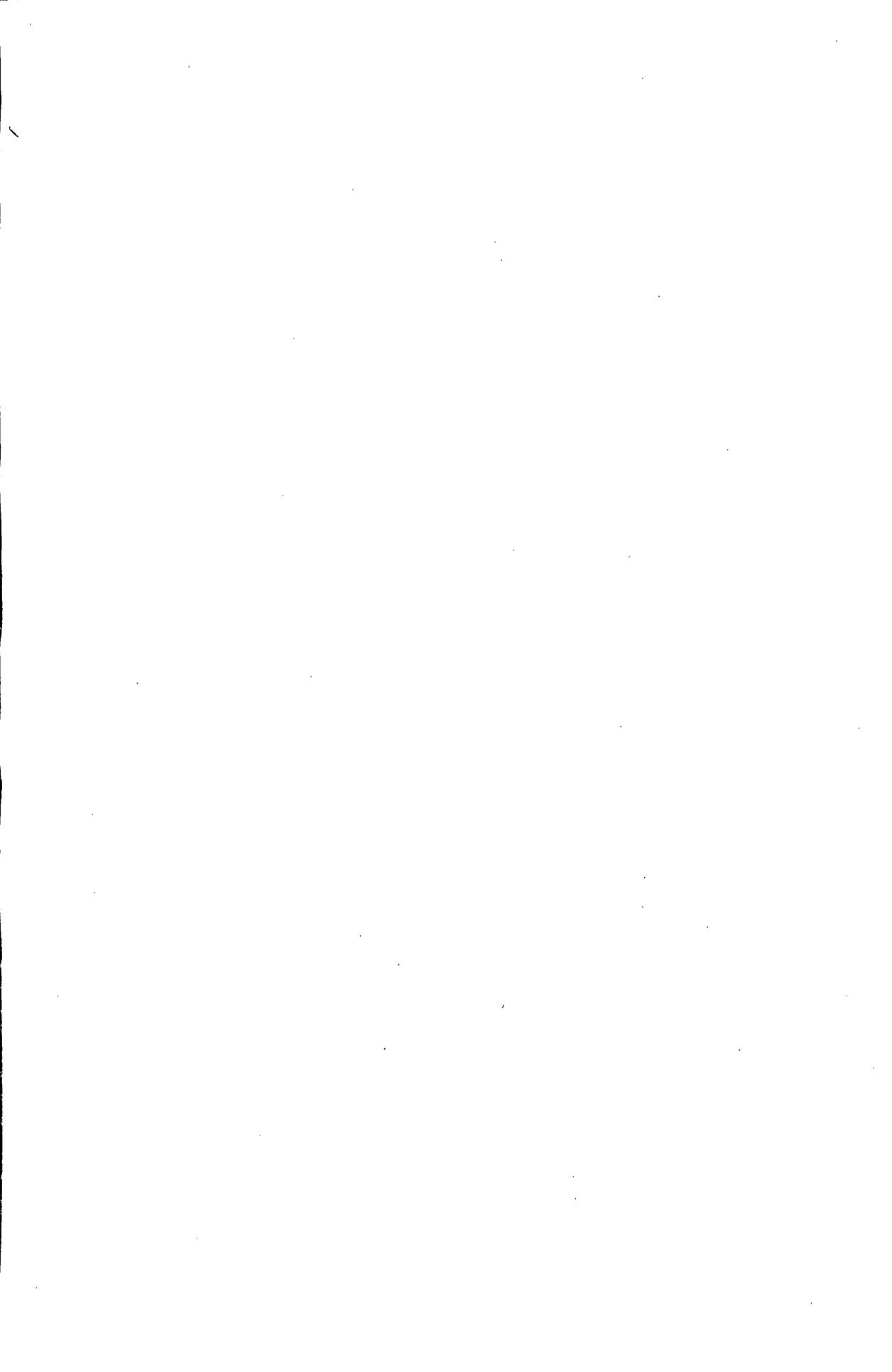


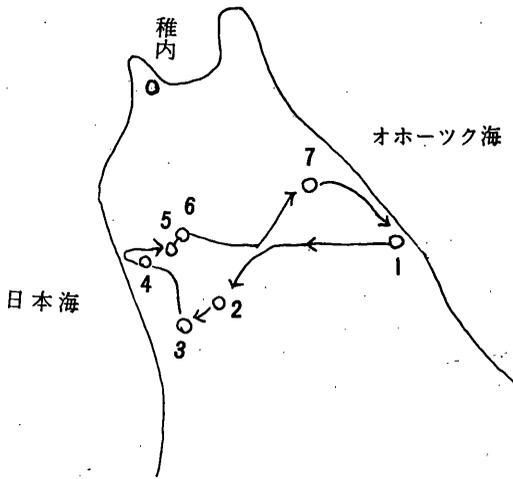
現地研究会記事



— 現地研究会 —

1 概要

<第1日> 9月4日：エクスカージョン (8.00～17.30)



図に示したコースをバス2台、マイクロバス1台で視察(参加人員150名)した。

1. 浜頓別町
2. 幌延町南沢(幌延町南沢地区草地)
3. 天塩町ウブシ(ウブシ泥炭草地試験圃)
4. 豊富町サロベツ(サロベツ実験農場)
5. 豊富町
6. 大規模草地(天北西部大規模草地)
7. 猿払村浅茅野(浅茅野地区草地)

<第2日> 9月5日：講演会と天北農試見学 (8.00～12.30)

(1) 講演会 (浜頓別町福社会館)

高倉正臣 (天北農試場長)

「天北農業の概観」

藤田保 (天北農試草地科長)

「草地の生産利用について」

奥村純一 (天北農試土壌肥料科長)

「天北地方に分布する鉍質土壌と牧草生産力」

(2) 天北農試圃場見学

2 印象記

北海道草地研究会現地研究会に参加して

佐藤 拓次郎*

9月4日午前8時15分、北海道草地研究会員の一行約170名は2台の貸切バスとマイクロバス、その他乗用車に便乗して、浜頓別町を出発し、浜頓別一豊富間産業開発道路を第1の目的地の幌延町南沢地区草地へ向つた。心配された雨はやはり降り始め、地区に到着のころ、どしやぶりとなつた。この地区の入口で幌延町役場の道見課長が雨の中、一行を待ちうけて、早速車中、説明をしていただいた。この地区は小生が開発局在勤中、昭和36年から42年まで重粘地における草地開発試験を実施してきた思い出深い地区であり、道営開拓パイロット事業により道路の建設、開畑が行なわれ、農業構造改善事業により機械・施設が導入・設備され、また大規模草地開発事業も本年より着手され、幌延町管内の乳牛育成の基地としてクローズアップされてきたが、われわれの試験が縁の下の石となつているものと考え、感無量のものがあつた。当時悪路になやまされた苦い経験をもつ熊越峠を下り、幌延町の市街をとおる、天塩大橋を渡り、ウブシ原野へ向つた。天北農業試験場天塩支場長の説明によりウブシ泥炭草地試験圃場を見学した。途中の国道40号線はやはり泥炭地上に築造されたため、路面がやや波うつている感じをうけたが、建設当事者の苦勞のほどがうかがわれた。この試験地では地下水位をいろいろと調節した場合、造成法と家畜の蹄没との関係を主題として試験を実施していた。草生のためには、むしろ水位の高い方が望ましいが、家畜を導入する場合はかなり水位を下げる必要があることは他の試験地における成績と同様である。

次に引返して再び天塩大橋を渡り、サロベツ原野を左手に眺めながら下沼を通り、豊富町市街からサロベツ泥炭地の横断道路を豊徳方面へ向い、北海道の3大泥炭地の一つであるサロベツ原野を車中から左右に眺めたが、雨天のため利尻富士の雄姿を望むことはできなかつた。

横断道路を引返し、開発局で実施しているサロベツ実験農場を訪れた。坂野所長と吉田専門官から概要の説明があつた。36年より開始し、造成9年目の草地に立つたが、造成当初3～4年ころは蹄没がかなりひどかつたけれど、現在では泥炭の分解と牧草のルートマットにより相当の地耐力ができており、乳牛も不安なく草を食べていた。ただ当初からみると地盤が約1m近くも沈下しているという説明があり、泥炭の理化学性の変化のはげしいのには今更のように驚かされた。農場の見学を終え、豊富町役場の2階のホールを借用して昼食をとつたが、最近建築されたデラックスの庁舎で、酪農ブームに乗つた町の財政の豊かさがうかがわれた。

午後からは、今回の圧巻である天北西部大規模草地を管理事務所長の説明により見学した。

あいにくの雨で造成草地の中に足を踏み入れることはできなかつたが、完成近い雄大な丘陵草地と何百頭もの育成牛の群を霧の中に望むことができた。この地区はネマガリザサ、クマイザサの密生地帯のため、前年、除草剤を航空機により散布して枯死させ、翌年火入れし、立木を除去し、重ブラウイングハローで開墾する造成方式を採用し、火入れしたばかりの地区もあり、1カ月ほど前に、ドリルで播種したばかりの地区は発芽して緑の見事なシユブールがえがかれていた。この地帯はやはり日本海岸の湿潤な気候の影響をうけ、乾草の調製は困難なため、草サイレーズが主体となるよう、設計変更の予定で白金牧場と同様のハーベストアの建設が望まれている。この点、太平洋の影響と高い標高のため霧の発生になやむ十勝中部の大規模草地も同様なことが痛感される。

豊富町を後にして、復路に入り、往路と同じ豊富―浜頓別線を通り、途中から猿払へ通ずる道路に入り、浅茅野部落の篤農家丹治氏の牧場を訪ねた。本人不在で営農指導所長から説明があり、家族11人

* 専修大学美咲農工短期大学

のうち、稼働人員4人、経営面積60haで乳牛53頭を飼養し、43年度の粗収入約700万円、うち純所得266万円を挙げており、乳牛を将来目標100頭として、着々畜舎とサイロの建設中で、しかも現金支出の節約のため、すべて自家労力で進めており、その努力とたくましい意欲に驚嘆させられた。車庫を見せてもらったが、トラクター2台のほか棚にはあらゆる機械整備用から建築用の資材機具がびっしりと準備されていた。

近くに農協の車庫があり、輸入した大型の自走式のフォーレージハーベスターを見たが、エンジンが170馬力もあり、牧草の刈幅が3.5mで、1日15haも刈取る能力をもつ、高能率の機械であるが、よほど均平な大型草地でなければその性能を十分發揮できないと考えられる。浅茅野部落では朝から雨が降つた様子はなく、日本海岸とオホーツク海岸とはこのように気候が違うものかと、その差が感じられた。それにつけても、天北西部での降雨は重ね重ね残念に思われた。

2日目は午前8時から浜頓別町役場裏に竣工したばかりの福祉会館で講演会があり、天北農業試験場長から天北農業の概況、藤田科長から草地生産利用、奥村科長から天北地方の土壌分類による草の生産力という有益な講演があつた。終了後10時から2班に分れて、天北試験場内の試験圃場を見学した。草種の組合わせ、品種の比較試験、施肥試験から草地造成利用の試験に至るまで草を主体とした数多くの試験が実施され、職員各位の御苦労のほどが推察された。また、人工気象室という最新の施設で試験が実施されており、まさに稲作に匹敵できるような試験研究体制が着々と進められている様子がかうかわれた。

2日目は天気がよく、野外で赤飯の昼食と試験場生産の新鮮な牛乳の接待があり、2日間にわたる現地研修会の解散となつた。

以上、9月3日の浜頓別駅到着の受付から5日の昼食後の解散までその間の宿泊、配車、ガイド、会食等に至るまで、すべて天北農業試験場長を始めとし、場員総出でお世話をいただき、当初予定人員の倍以上の参加者に対し、最後まで無事予定のスケジュールを完了させていただいた、その筆舌に尽しがたい御苦労、御厚情のほどまことに感謝に堪えず、ここに参加会員各位とともに厚く御礼申しあげる次第である。

最後に2日間の検討会を通じての感想を述べると、最近まで本道で最も未開発地域が多く、低位生産になやんできた天北農業が農用地の約80%までも草地に切換えられ、酪農専管に踏み切り、更に毎年草地の拡大と家畜頭数の伸びに目覚しいものが感ぜられるのは、天北農業試験場が道北地帯の草地農業のセンターとして試験研究と農家に対する指導と啓蒙に努力されたことが大きな推進力となつているものと考えられる。

今や国内における食糧需給事情は戦後とは一変し、食糧管理による余剰米の累積により、政府は総合農政の見地から、稲作一辺倒を切換え今後、稲作面積を20%減少させ、米生産も200万t減産させ、その振替えとして、畜産と稲作以外の作目に転換させる方針を打出している。過去3年に1度の割に冷害に苦しみ、とかく米の品質を批判されてきた本道にはきびしい現実がせまつてきた。従来、天北地方は稲作限界以北であり、畑作も馬鈴薯、ビートのような寒冷地作物が主体をなしており、低い農業所得になやんでいたが、土地資源の比較的豊富なだけに比較的気候・土地条件に適応性が広い草地酪農に転換することにより、比較的安定した収入を挙げるのが可能となり、これが41年度から実施に移された国営大規模草地事業により拍車がかかけられ、最近2～3年間における草地と家畜保有頭数の伸びは実に目覚しいものが見られ、20年後のビジョンもえがかれている状況であり、天北農業は勿論、北海道の農業の発展のため慶賀に堪えない。われわれ、草地・畜産の分野で志を同じくする者として衆知を結集して、国内の食糧基地としての発展に寄与したいものとする。